

ライフ  
ストーリー

岡嶋 千宙さん

(2017年3月神学研究科博士課程前期課程修了)

誰のせいでもない 私の性を生きる

2019年8月8日 大阪市内某所 15:10～17:20

インタビュアー K:神楽 かな (在校生)

インタビュイー C:岡嶋 千宙 (卒業生)

2013年4月 関西学院大学神学部入学 (3年次編入)

2015年3月 同神学部卒業

2015年4月 同神学研究科博士課程前期課程 入学

2017年3月 同神学研究科博士課程前期課程 修了

2018年4月～ 日本基督教団向島伝道所 伝道師

**K:** はじめまして。神楽かなといいます。現在、関西学院大学神学部の3回生です。

**C:** よろしくお願いたします。最初に簡単に自己紹介しますね。関学には、2013年に入学しました。それ以前に、別の大学で学士号をとっていたので、3年次編入です。神学部で2年間、院に進んで修士で2年間、計4年間を関学で過ごしました。卒業後は、京都の伏見区にある障害福祉施設の職員として働き、2年目からは、同じ施設内にある向島伝道所という小さな教会で、伝道師の働きをしています。今年で42歳なんです。関学に入学したのは36歳のときで、卒業したのは40歳のときでした。ほら、大学に入ってくる新入生って、圧倒的に10代後半から20代前半の「若い」人たちが多いじゃないですか。わたしなんか、その人たちからしてみれば、「親」世代ですから。だからね、こんなわたしの話を聴いて、何か役に立つようなことを得てくれるのかなーと、ちょっと不安なんです。「あまりにも違いすぎ!」と感じつつも、まあ、「多様性」がテーマなので、「こんな変わったのもいるんだね～。案外、関学っておもしろいじゃん!」と思ってくれれば良いんですけど。

**K:** 確かに、年齢ということからすれば、「多数の」新入生や在校生とかなり離れてますよね。でも、だからこそというか、離れているからこそ伝えられるメッセージ、あるいは、離れている人が話すからこそ響く言葉ってあるような気もするんです。それに、まさしく、多様性を尊重す

る大学ということになれば、たとえ多数ではなくても、30代、40代、50代、60代、70代の新入生、ということだってあっておかしくないわけで。岡嶋さんのお話も、大事な証、証言になってくれると思います。

## ①わたしのセクシュアリティ

**K:**いきなりお伺いしますが、岡嶋さんは、ご自身の「セクシュアリティ」について、どう思っておられますか。「思う」という表現じゃないほうがいいですかね。どんなセクシュアリティで生きておられますか、と聞いたほうが良いかな。とても直接的で、失礼な質問だということを認識した上で、あえてお伺いします。

**C:**そうですね。感覚としては、どんな性を生きているか、という表現が近いかな。わたし、セクシュアリティのことを話すとき、よく「性を生きる」という言葉を使うんです。「性」は「Sex」あるいは「Sexuality」の性で、生きるは、「Live」の生きる。漢字で書くと違う文字だけでも、読みはどちらも「せい」。日本語だと、この点が面白いと思うんですけど、「性」って、「生」ってことと切り離せないと思ってます。

**K:**確かにそうですね。そもそも、人間の性がなければ、子孫が残らないわけですし、生まれてすぐに性が決められるわけですし、その後もトイレとか、更衣室とか、パスポートとか、生活の至る所で、性が関わってきますからね。その意味でも、「性」と「生」って、ものすごく関連づいている。

**C:**そうそう。で、これに、もう一つの「聖」(Holy)も加えられると、うちは考えています。性は生きることであり、聖なることであると。

**K:**岡嶋さんは、ご自身のセクシュアリティをどう表現しますか。

**C:**その質問は、「LGBTQIA+」のどれに該当しますか？ということだと思っただけで、わたしは、出生時に「男性」として判断されて、戸籍に「次男」として登録されました。その後、30年以上、男として生きてきましたが、今は社会生活を「女性」として過ごしています。ということからすると、さきほどの横文字の中では、「T」のトランスジェンダーです。

男性から女性へのトランスジェンダーということで、MtF トランスジェンダーと紹介することもあります。

K：なるほど。

C：誰を好きになるか、については、性別にこだわりはありません。性別を基準にしていない、というか。どちらでもいい。好きになった人が好きな人。あえてくるとすると、女性／男性、どちらも好きになるという意味でのバイセクシュアルとか、あるいは性別を問わずに人を好きになるという意味でのパンセクシュアルとか、そんな分類になるのかな。

K：MtF トランスジェンダーで、バイ／パンセクシュアルということですけど、30年以上、男性として生きてきたっておっしゃいましたよね？

C：はい。そうですね。

K：じゃあ、ご自身のセクシュアリティに気づき始めたのもそのくらいの時期だったんですか？

C：うーん、その質問も、難しいんだよね。「性別」ということに関して言えば、「自分が女だ！」って強く思ったことは、おそらくないです。

K：ないんですか？

C：うん。むしろ、「自分は男だ！」という感覚のほうが。小さいときから「男性」としての自己認識は持ち続けてました。というか、今でも、完全にはなくなっていないと思うよ。

K：面白いですね。いくつか、トランスジェンダーに関する本や記事を読んできたりするんですけど、「自分は男、あるいは女なのに、女、あるいは男として生まれてきてしまった！」という表現がつかわれてたりするじゃないですか。「Born in a Wrong Body」とか言われて。

C：そうですね、そんなストーリーが溢<sup>あふ</sup>れてるんじゃないかな。その一つの要因は、性同一性障害の診断基準にあると思うけど…。

K：そうなんですか？

C：うちが言いたいのはね、わたし自身は、「間違っ<sup>あや</sup>まった身体に生まれた」という感覚がなかったというのかな。「男」であることは、否応無しに突きつけられて、どう転んでもそれを覆すことができないし、受け入れざるを得ないし。それが、「間違い」だとは思えなかった。「わたしは完

全に男性です！」と認識していた。

K：へえええ～！

C：ただね、だからこそ、もう完全に「男だ！」と分かって、自分でも「男だ！」と自覚していたからこそ、「女性として生きたい！」という感覚は逆に強く抱くようになったんだと思います。「間違っただけに生まれたから元に戻す」のではなくて、「男性に生まれたのは間違いではない。だからこそ、別の身体（性別）で生きたい」という思い。分かります？

K：なんとなく。

C：「なんとなく」ですよ（笑）

K：「男性」であることを完全に自覚していたということですけど、「男性」であることに、違和感というか、嫌悪感というか、そんなのがありましたか。

C：Yes でもあり、No でもありかな。違和感が全くなかったと言えば、嘘になります。最初に自分の、というか、自分を含めて人間全体の、というか、「性別」というものに対して違和感を覚えたのは、確か、幼稚園か保育園、小学校に入る前のときだったと思います。

K：早いんですね。

C：わたしね、おままごとをするのが大好きだったんです。でも、家には、おままごとグッズがなくて、友だちの家に行ってよくおままごとをしていたんです。それである日、友だちの家でおままごとをして、気分よく家に帰ろうとしていたら、帰り道で、別の友だちに言われたんです。「おまえ、男なのに、おままごとしてたのか？ 気持ち悪い！」って。このときから、自分は「男なんだ」ってことを認識するようになったんだと思います。それと同時に、どうやら、人間には、「男」とそうではないものがある、両者は混じり合わないもの、混じり合ってはいけないものなんだってことに気づいた。

K：面白い気づきですね。

C：あ、これ、あくまで、わたしが過去のことを想起して言っているので、その当時、だって、まだ6歳になる前くらいのときですからね。

今言った言葉通りのことを思っていたとは考えられないですよ。さすがのわたしでも。

K：ははは。

C：ただね、感覚的に、「性別」っていうものがあるって、それが二つに分けられて、一方が、他方と混じることはない、混じるのは嫌がられることだっていうのは分かったんです。で、わたしはそれが嫌だった。だって、それを受け入れることは、自分の好きなこと、おままごとを諦めないといけなくなるわけだから。だから、ここが、性別に対しての違和感の始まりかな。

K：なるほど。「性別」に対しての違和感は、幼稚園か保育園のときということですが、では、「男性としての身体とは別の身体で生きたい」と思い始めたのはいつぐらいからですか？

C：うん、それは、案外記憶が確かなところ。思春期を迎えた時ぐらい、小学校高学年から中学校の初め。自分が持っている性別「男性」と、持っていない性別「女性」との区別が、より一層はっきりと分かるようになってきたことをきっかけに。

K：身体の変化ですか？

C：そうだね。その時期って、身体の変化も起こるし、多感でいろんなことに気づき出すじゃない？ 自分の世界がぐぐっと開けていく。同じ環境なんだけれど、見えるものが違ってくるし、今まで見ていたものに、新しい意味づけができるようになる。

K：そうですね。そのあたりから、上っていきますよね。大人の階段。

C：そうそう。わたし自身も、周りの友達も、第二次性徴期を迎えて、身体の変化が出てくるわけじゃないですか。わたしは、体毛が濃くなる、声が太くなる、筋肉がついてくる、などなどの変化がある。他方で、わたしとは違う性別を持つ友達は、体つきがふっくらしてくる、肌がきめ細かくなっていく、胸が大きくなり出してくる、月経を迎えるようになる、などなど。その変化によって、自分と女子たちの差、完全な違いを実感させられるわけです。

K：アーーー。

C：ええ、あ————の瞬間です。英語に、Point of No Return という表現がありますが、覆水盆に返らず。戻れない。自分は男だ！ 男なんだ————！ もう戻れないんだー！と。うちね、毛が濃かったの。ひげも、体毛、すね毛とか腕の毛とか、髪の毛も。あとは性器周辺の毛も濃かった。何が言いたいかって言うとね、うち、第二性徴期を迎える前まで、自分はずっと、つるつるの身体でひげも体毛もなく、きれいな身体のままです。そして、そのうち、女性の身体になっていくんだって。目の前に、祖父、父親、兄という「男性」のロールモデルはいたんだけど、その人たちとは違って、きれいな人になれるんだって勝手に想像してた。

K：はい、だけど。

C：きれいなままではいられなかった。もちろん、何が「きれい」かっていうのは、あくまでもうちの主観ね。毛があっても、濃くても、キレイと思う人だっているわけだし。だけど、うちは、毛があって、声も太くなって、という自分の身体の変化が嫌だった。受け入れたくなかった。

K：なるほど。

C：一方で、うちとは違う性別を持つ友だちは、そうはなっていないわけ。むしろ、もっともっとキレイになっているように見えた。隣の芝は青く見える、じゃないけれど、隣の女子たちはとてもキレイに見えた。

K：そうなんですネ。

C：身体の変化はやっぱり大きいよね。それまでは、例えば学校の名簿で男女別に分けられて、「女」と「男」の区分があること、どうやら自分は「男」に分類されるらしいことを、周りから知らされて分かっていただけだった。それが、身体の変化という具体的に見える形で降りかかってくると、自分のこととして受けとめざるを得ないじゃない？

K：そうですね。まざまざと見せつけられますものね。

C：自分の身体に降りかかってくる男性化が否応無しに進んでいく。「男性」であることが表面化していく。そして、より一層、自分の住む社会にある性の規範、慣習に気づくようになっていく。

K：身体で男性化を経験し、経験として男性であることを強いられていく

わけですね。

C：うん。ものすごい葛藤だったよ。男性であることが、身体的にも経験的にも確実になっていけばいくほど、その性であることが嫌になっていく。でも、嫌になったからといって、どうすることもできなくて。

K：誰かにその思いを伝えたりしたんでしょうか？

C：いや、伝えられませんでした。うちね、青森で生まれて、高校卒業まで青森で生活をしてたの。思春期から青年時代、大学入学まで、1980年代後半から1990年代前半を日本の片田舎で過ごしてた。

K：そうなんですね。青森ですか。

C：まだまだ日本全体が性の多様性というものに関心を持っていない時期で、今みたいにメディアで活躍する人なんてほとんどいなかった。それに、いたとしても、メディアを通して入ってくる情報って限られてた。テレビのチャンネル数も都会に比べたら圧倒的に少なかったしね。フジと朝日系列の番組が見られるようになったのは、確か、高校生になってからのことだったから。

K：へえ—————！ それは!!

C：でしょ。だからね、情報が少なかったの。図書館に行っても、「性」に関する本なんてほとんどなくて、運良く見つけられたとしても、性の多様性のことなんて触れられていない。それに、うちが気づかなかっただけかもしれないけど、他に自分の性別に違和感を覚えている人、いなかったから。聞ける人、相談できる人がいないわけで。

K：ご家族には？

C：伝えなかったよ。というか、伝えられなかった。まあ、これも青森の特徴かもしれないけど、出る杭は打たれるという風潮が、うちが育ったところでは強くあった。上手く生きていくためには、地域の中にとけ込む必要がある。「特別」であること、「変わっている」ことはタブー。だから、男である自分が、女性になりたいと思ってる、なんて言えなかった。友達にも。言ったら嫌われるんじゃないかって思ってたし。親には特に。

K：そうだったんですか。

C：あ、でも一回だけ、思いっきり勇気を出して、父親に聞いたことがあった。

K：何をですか？

C：「女の人って、手術でおっぱい大きくすることができるんでしょ？」って。

K：おー！ 大胆な。

C：ははは。大胆でしょ。中学か高校だったか、忘れたけど、たまたま、何かのテレビ番組で、そんなことがちらっと言われてて、うちはそれがずーっと気になって、「手術で胸が大きくなるのなら、もしかしたら、自分も？」って。今考えてみれば、胸をおっきくしたからって、女性になれるわけではないんですけど。それに、これも一つの固定化された女性像でしかないんですけど。でも、その当時は、決定的な情報不足の中で生きていましたから。「女性になる」＝「胸を大きく」と結びつけてたんですよ。で、確か、冬。冬には家族でスキーによく行ってたんだけど、その時は母と兄が行けなくて、うちと父親の2人。「これを逃したらもう聞けない！」って思って、勇気を振り絞って聞いてみた。助手席から、運転する父親に向かって。

K：その光景、何か思い浮かんできそう。

C：心臓バクバク。自分のことだとばれないように。「テレビでも言われてたことを聞いただけだから、怪しまれることはないはず！」と思いつつも、ばれたらどうしよう、と怖くて。手に汗握ってました。

K：緊張の一瞬。

C：ええ。で、父親の反応は、「あー、そうだね」ぐらいのほんとに軽いものだった。運転してたからなのかも知れないけど。うちとしては、もっと聞きたかったんだけど。「それってどうやったらできるの？」とか、「男の人でもできるの？」とか。でも、ばれるのは怖いから、それ以上は聞かず。

K：その後に、同じ話題が出てくることもなかったんですか？

C：うん、なかった。

K：じゃあ、青森にいる間は、ずっと？

C：そうだね。「女性になりたい」という思いは自分の中だけで出さずにいたよ。というか、青森を出てからも当分の間は。

K：ああ、それが30年以上男性として、ということに？

C：うん、そう。でも、周りにばれない程度では、「男性であること」に抵抗を試みてたけどね。

K：抵抗ですか？

C：よくある話かもしれないけど、母親がいないときに、化粧をしてみたりとか、母親の服を着てみたりとか。でも、化粧は全くダメだった。むしろ逆効果。

K：逆効果？

C：だって、化粧の仕方、全く知らずでやるから、結果は散々だったよ。鏡に映った自分の顔を見て、愕然としてしまって。化け物。青髭うっすら。妙に白い顔。不気味に浮かぶ赤い口。「これじゃ無理だ。化粧してもきれいになれないんだから、女性になりたい、なんて思っはいけないんだ」って。まあ、しょうがないんだけど。

K：女の子であれば、少しずつ化粧の仕方を練習して行って、時間をかけて身につけていったかもしれないですね。

C：そう。誰にも怪しまれずに、たたかれずにね。でも、「男」だったから。たまにしかない母親不在時に、おそろおそろやる化粧じゃあやっぱりダメだよ。だから、「女性になりたい」という思いは自分だけのものにしておいて、ひたすら「男」としての生を貫いてた。

K：30年間？

C：30年間。より詳しく言えば、 $30 + \alpha$ 年間。その $30 + \alpha$ 年の間に、「男性」としていろんなことを経験して。恋愛をして、同性に対しては片思いばかりで付き合うまでになかったけどね。そうこうするうちに、素敵な女性に出会って結婚をして、子どもが生まれて。

K：お子さんいらっしゃるんですね！

C：うん。びっくり？

K：いや、びっくりです（笑）。

C：だよー。います。

K：今は社会生活を女性として送っている、ということでしたけど、30 +  $\alpha$ 年の期間、男性として生活してらっしゃったんですよね？ で、その間に結婚もされて、子どもさんも生まれて。

C：はい。

K：今は、お姿も女性寄りで、社会生活を女性として過ごしていらっしゃる。

C：はい。

K：ということは、「男性」から「女性」への移行、というか、女性として生きようと思ったのは、お子さんが生まれてから後だった？ということですよね??

C：そうですね。ますますびっくり？

K：いや、びっくりです！ 何となくですけど、トランスジェンダーの方って、もう生まれたときから、「自分は生まれた時に付けられた性とは別の性で生きるんだ！」って決めていて、その思いを貫いてらっしゃると思ってました。

C：うん、その意味では、うちも思いは貫いてきたつもりだよ。貫くというか、捨て去ることができなかったというか。

K：なるほど。

C：でも、時代であったりとか、住んでる場所の環境であったりとか、いろんな事情があって、その思いを表面に出すことはできなかった。生き抜くためには、男性として生きなければいけなかった。というか、それしか、生きる術を知らなかったから。で、「順調に」(笑)男性として30 +  $\alpha$ 年間生きてきて、結婚もして、子どももいて、という生活を。表向きは、何だろう、社会に通用する「男性」をそつなくこなしていたわけ。

K：そうなんですね。

C：うん。うちの年代でトランスジェンダーの友達、何人かいるんだけど、案外、同じような境遇の人、多いよ。女性から男性への FtM さんの場合はどうかよく分からないけど。やっぱり、高度経済成長期の余波が残ってる時代の日本って、まだまだ「男は男らしく」、「女は女らしく」

という空気感が強かったから、生きるために、とりあえずそのルールに乗っておくというか。今は、「自分らしさ」が強調される時代ですから、その視点からすれば、「自分らしさを犠牲にして、逃げてるじゃない！」と言われれば、まあその通りなのかもしれないですけどね。

K：逃げですかね…。

C：いや、分かりません。正直、自分でもまだ整理できてない部分なので。

## ②大学生活

K：社会に同調して生きた30年あまりを経て、今は女性として生きていらっしゃるんですよね？ 女性として生きていこうと決意したきっかけとかあるんですか？ というか、結婚されていて、お子さんもいて。そういう環境でしたら、かなりの決断だと思うのですが。

C：全くその通りで、かなりの決断でした。思いっきり悩みました。思いっきり苦しみました。思いっきり後悔もしました。思いっきり泣きました。

K：でしょうね。

C：ええ。命を終わりにしたいと思ったことも。それでも、決断して、今にいたっているのは、関学で学んだ4年間があったからです。

K：え？ じゃあ、関学の学生時代に？

C：はい。でも、自分で意図していたわけじゃなかったんです。思いもよらないところで、想定外の形で与えられたきっかけというか。

K：想定外？

C：関学に入学したのは、キリスト教を伝える人、伝道師になりたいと思ったからなんです。神学部ですから、ご存知ですよ。伝道者コースというのがあって、それ以前に別の大学で学士号をとっていましたが、3年次編入で入学しました。それで、そのときは、大学でセクシュアリティのことに触れるなんて全く思っていなくて。むしろ、関学で学んだら、「自分の性のことで迷うことも、誰にも言えない思いを抱える

ことも、悩むこともなくなって、神様の言葉を伝える働きに邁進<sup>まいしん</sup>できる！」って信じ込んでいました。めっちゃ単純でしょ（笑）。でも、蓋を開けてみたら、思いっきり向き合わないといけなくなって。

K：思いがけない何かがあった？

C：そうですね。思いがけない出会いです。

K：出会いですか。

C：はい。神学部で教えていらしゃった榎本てる子さんです。

K：榎本先生との出会いがきっかけだったんですね。もっと具体的にお教えいただけませんか？

C：はい。榎本先生、てるちゃんって実践神学を教えていたんだけど、授業ではゲストスピーカーを招くことがよくあったのね。実践の場で活躍している人に来てもらって、生のお話を聞かせてくれる。で、そのゲストスピーカーを招いた授業で、何回目だったかな、トランスジェンダーの方が来てくれたの。初めはあまり興味がなくて、半分ぐらいしか聞き耳を立てていなかったんだけど、お話が進むにつれてのめり込んでいったというか。のめり込ませられたというか。聞かざるを得ない状況になっていったというか。身体が勝手に反応して、その人の話をぐいぐい吸収していった。

K：そうなんですか。どんなお話だったんですか？

C：その方のライフストーリーが中心だったんです。小さい頃、どんな風に生活してたかとか。学生時代はどうだったかとか。就職してからどうだったかとか。今はどう生きているかとか。

K：はい。

C：で、その方の話が、全く同じではないんだけど、うちと重なる部分が結構あって。小さい頃から男性であることに違和感を覚えていたこと。結婚してお子さんもいらしゃること、とかね。

K：共感できる部分が多かったんですね。

C：うん。だから、驚いたというか。知らぬ間に引き込まれていった。自分の話を聞いているような感覚で。今まで、そんな人、出会ったことなかったから、まさかそんな人が実際に目の前に現れるなんて。しかも、

お話をしてくれるなんて。今、ここで？ え？？？ 稲妻、ズドン！です。

K：雷鳴轟く。

C：うん。でもね、決定的に違うところがあったの。

K：違い、ですか？

C：うん。今、自分の目の前で話してる人は、女性として生きている。一方で、自分かというと。その方と似たような環境で生活してきて、似たような境遇にあって、似たような思いを抱えてきた。けれども、今も男性として生きている。その違い。向こうは女性。こちらは男性。

K：なるほど。

C：「この違い、何だ？」って。「どっからくるんだ？」って。いったい、「自分はどうしたいんだ？」って。「どうしたらいいんだ？」って。

K：改めて、自分と向き合うことに？

C：そうだね。この授業をきっかけに、今まで表に出さずにいた「女性になりたい」という思いと正面から向き合うようになった。それと、「男性」として生きてきた、生きている、この状況を、今一度、見つめなおすことを余儀なくされた。

K：そこから女性になろうと思いだされたんですね。

C：いや、そんな単純じゃないかな。さっきも言ったけど、それ以降、思いっきり悩んで、迷って、苦しんで、しんどくなって。右に行き、左に行き、前に行き、後ろに行き。進み、戻り、立ち止まり。もう、性ということについてはぐちゃんぐちゃん。家族のこともあったし、自分一人の問題ではなかったからなおさら。

K：そうだったんですね。大変な時期を、関学の学生時代に経験された。

C：そうね。大変。でも、今思うとね、うちにとっては最高のタイミングで、自分の性と向き合うきっかけが与えられて、性についてちゃんと考え直し、決断していく時間が与えられたと思うてるの。最高のタイミングと最高の環境。最高で最善。

K：そうなんですか？ でも、思いっきり悩んで、苦しんだんですね？  
自分の命を終わらせようと思うくらいに。

C：うん、そう。それは間違いなくて、だから、思いっきりしんどかった。ほんっと、想定してなかったからね。入学前は。まさかこんなことになるなんてですよ。

K：それでも、最高で最善だったんですよね？

C：うん。これが、別の時期だったら、例えば、高校生のときとか、結婚する前とか、だとしたら、別の結果になっていたと思う。もしかしたら、実際に命を絶っていたかもしれない。関学生のときに与えられたからこそ、生き抜くことができた。で、決断することができた。

K：その要因は何だったんですか？

C：やっぱり、てるちゃんが存在が一番大きい。うちね、編入学の試験のとき、面接官が榎本先生だったの。で、その時の印象は、「あ、この先生とは、大学生活でほとんど交わりを持つことなく終わるんだろうな～」と思った。そもそも、実践神学とか興味なかったし、てるちゃんのプロフィールを読んでみたけどピンとこなかったし、面接の時にも、あまり印象に残ってなかったし。

K：そうなんですね！ 先ほど榎本先生のことをお話しされたとき、とても嬉し<sup>うれ</sup>そうで、生き生きされていたので、初めの頃から慕っていたのかと。

C：全く!! だけど、消極的な理由で授業をとってみたら、思いがけない出会いが与えられて、そこからどうしたら良いか分からなくなって、初めのうちは自分で何とかしようと思ってたんだけど、結局一人では抱えきれなくなって。誰かに相談しようにも、誰に相談したら良いか分からないし。で、もうどうしようもないから、「じゃあ、そのきっかけを作ったてるちゃんのところに行くしかないじゃん！」って。行って、「先生の授業がきっかけで、うち、今こんな状態になっちゃったんです！ どうしたらいい！ どうにかして！」って言いに行ったらいいじゃない、と。

K：責任とってもらおうと？

C：まあね。責任とってもらおう、が1割。でも、それ以上に、とにかく誰かに聞いてもらいたかった。30 +  $\alpha$ 年間だれにも言えなかったこと、

今まで自分の中にだけ留めてきたこと、だけど、もう留めておけるだけの気力も自分の中に残ってない。とにかく、聞いてもらいたかった。

K：誰かに聞いてもらう。大事ですよ。でも、お話するの、かなりの勇気がいったんじゃないですか？

C：うん。だからね、最初は、ピンポイントで話せなかった。「先生の授業を受けてから、何となく自分の中でもやもやするものがある」とか。そんな感じ。

K：ですよ。

C：でも、てるちゃんはそこら辺を見抜いてるというか、その奥に何かがあるな、ということを感じてたんだと思う。「もやもやの形ってどんなもん？」とか、「そのもやもやがあることで、自分、どう感じてる？」とか、うちの中の思いを引き出すような質問をしてくれた。で、辛抱強く聴いてくれた。授業と授業の合間、1時間30分をまるまるうちの面談に費やしてくれたりして。

K：聴き人、ですよ。

C：うん。まさしく。まあ、それでも、1回のセッションではすべてを伝えきれなくて、何度かてるちゃんのところに足を運んで、研究室で話を聴いてもらってた。それで、4度目くらいのときかな、初めて、自分の口から、「うち、女性として生きたい！」って言うことができた。その言葉を放った瞬間に、涙が出てきて、止まらなくて、泣き崩れて。そんなうちをてるちゃんは見守ってくれて。ひとしきり泣き終わったあと、ギュッとハグしてくれた。あ、ダメだ。思い出すと、また泣きたくなる。あの感覚。

K：わたしも泣きたくなります…。

C：こらえてこらえて（笑）。それからだね、「女性として生きていく」という方向に動き出したのは。

K：そうだったんですか。

C：でもね、だからって一気に行けたわけじゃないよ。動き出したけど、ぶれぶれだった。やっぱり、右、左、前、後。進み、戻り、立ち止まり。の繰り返し。どっちにいったらいいのか、どこに向かったらいいのか、

分からなくなって、生きる意味も失いかけて。関学からの帰り道、あまりにも分からなすぎてしんどくなって、涙を流しながら帰ったこともあるし。

K：甲東園へ向かうあの坂道を？

C：うん。あの坂道を。でもね、幸いにも、ぶれぶれの状態でありながらも、いくらどん底に陥ったとしても、自分で見つけた道を自分で歩いていくための環境が整えられていったの。てるちゃんを中心にしてね。

K：というと？

C：てるちゃんがね、いろんな人、いろんな場所、いろんなイベントを紹介してくれて、つなげてくれたの。あの授業でゲストスピーカーとしてきてくださった方とも個人的に会う機会をつくってくれたり。セクシュアリティのことで活動されている人たちに会いわせてくれたり。性のことに関わらず、生き辛さを抱えている人たちが集える場所に連れて行ってくれたり。性の多様性についての理解のある牧師を紹介してくれたり。他大学でのイベント情報を「こんなんあるで」とメールしてくれたり。とにかく、うちが自分で決めた性（生）を生き抜くために、必要なサポートを整えてくれた。てるちゃんを通して知った、それらの人たち、場所って、安心して自分を語れて自分でいられるような環境だった。無理して話す、繕った自分である、というのではなくて、自然と、というか、気負わずに、というか、防衛せずに、というか。だから、「女性になりたい」という思いはもちろん、そう思いながらも、なかなか前に進めずにいること、その過程で苦しい経験をしていること、逆に少しだけ前に進めたような感じを抱いたこと、とか、気兼ねなく話すことができて、ぶれぶれの自分を見せることができた。そんなうちでも、受け入れてくれた信頼できる仲間たち、安心できる居場所が確保されていったの。もちろん、語りたくないときには語らなくていいし、行きたくない時には行かなくていいしね。

K：それって、すごいですね。

C：うん。だからね、関学での大学生活ということでは、うち、かなり恵まれていたと思う。てるちゃんが整えてくれた環境があったから、一緒

に学んでいた学友にもカミングアウトすることができたし。うちのストーリーを聞いた友人たちは、ほとんどがうちの思いを受けとめてくれて、助けてくれた。今でも、大切な大切な友人たち。

K：素敵ですね。

C：うん。あとは、レインボーウィーク。入学した年は、関心もなかったから、参加しなかったどころか、気づきもしなかったんだけどね（笑）。でも、その年の秋以降に、自分の性と向き合うようになって、大学内でそんなイベントがあるってことを知って。で、関学3年目、大学院1年目の2015年に参加してみたの。今でも覚えているのはね、図書館前のパネル展。教職員、卒業生からのメッセージが貼られていて、一つひとつの言葉に心が震えた。てるちゃんが整えてくれた環境もそうだったけど、それ以外にも、「自分の思いを受けとめてくれる人がいるんだ。同じような思いを持って、言葉にしてくれる人がいるんだ」って気づいて。すごく嬉しくて。一人じゃないって思えた。

K：パネル展、素敵ですよ。わたしも、入学したときから、毎年、楽しみにしています。あそこに掲示される言葉の一つひとつに、命があるというか。なんでしょうね。生きることが感じられる。飾っていない、本音というか。

C：そう。あのパネルの持ってるメッセージ性ってとってもおっきいと思うよ。性の悩みを抱えてる人にとっても、そうじゃない人にとっても。だから、もっと多くの人に、見てもらいたいし、見て、いろんなことを感じてほしい。

K：ですよ。

C：そんな思いから、今度は自分が関わる側になろうと思って、関学最後の年、2016年には、レインボーウィークの実行委員として活動したんだけどね。

K：あ、そうだったんですね。

C：うん、で、そこでの出会いも、また素敵なものだった。人間福祉学部の武田丈先生をはじめ、人権教育研究室の職員の方々、他の学生たち。信頼できる仲間が増えていって、もう一つの安心できる場所が整えられ

ていった。さらに、今度は、自分の側から発信する、という経験をさせてもらったのも大きいね。

**K**：企画に関わることで性についての意識が変わったとか？ 別の気づきがあったとかですか？

**C**：そうだね。性のことって、何よりも自分の問題というところだったんだけど、でも、そこで留まらないじゃない。性って、関係の中に生じるものでもあるから。

**K**：確かに、関係としての性、という大切な一面。

**C**：だからね、自分の性を含めて、一人ひとりの性を大切にし、尊重し、そっと見守り受け取れる空間、というか場所をつくる、ということが必要なんだなーと。で、そのために、自分は何ができるのか、何をしたいのか、考えられるようになった。

**K**：自分の性を客観視できるようになった、という感じですか？

**C**：完全な客観視ではないんだけど、近い感じ。自分の性は、やっぱり主観のものだから、どうしてもそこは譲れないんだけど、そこを中心として、もっと広く見られるようになったと言うか。で、広く他者の性を考え、見られるようになると、また、自分の性についての見方が変えられていったりと。

**K**：良い流れ、ですね。

**C**：うん。そんな気づきをもらったのも、レインボーウィークに関われたからで、もっと遡れば、関学に入学したからで。それ以外にも、関学、という場所がやっぱり良かったんだよね。今になって振り返ると、つくづくそう思います。保健館の看護師さんにもお世話になったし。図書館のメディア視聴コーナーも居心地の良い場所だった。結構良い作品をそろえていて、時間があればその度に足を運んで、セクシュアリティに関する映画を見まくってた。『ミルク』とか、『わたしはロランス』とか、『トランスアメリカ』とか。めっちゃ充実した時間。

**K**：はい！ わたしもよく利用します!!!

**C**：良いよねー。そう、だからね、人、場所、環境ということで、うちは、本当に恵まれた学生生活を送れたと思っています。その経験がある

から、今こうして、お話をできているし、インタビューに応じようと思ったわけだし。もし、今、自分の性のことで悩んで、苦しい学生生活を送っている人がいるなら、あるいは、苦しんでいないにせよ、性のことについて、関学がどんなところなのか分からずにいる人がいるなら、気づいてほしいなと願うんです。関学の全てがそうだ、というわけではないけれど、探せば助けてくれる人、理解してくれる人、居心地の良い場所、安心できる場所があるんだってことを。で、気づいてもらえるために、もっと気づきやすい環境にしていってほしいなーと願うわけです。

**K**：今のお話だと、関学での学生生活、恵まれていて、過ごしやすかったという印象を受けましたけど、ご自身の性のことで、何か嫌な思いをすることとかなかったんですか？

**C**：ありあり（笑）。学生生活の途中で、男性から女性へ移行したので、中途半端というか、過渡期というか、そんな姿なんですよ。どっちにもつかずというか。男性なのに、何か違う雰囲気を出しているとか。あ、ほら、髭が濃いつて話したでしょ。顔は男なのに、服装とか、何となく微妙。そんな容姿だからね、やっぱり言われることはあったよ。「おまえ、気持ち悪いなー」とか。面と向かってのときも、こっそりのときも。

**K**：そうだったんですね。

**C**：うん。その時は、めっちゃへこんで、「もう嫌だ!!」って思うんだけどね。家に帰って、シャワー浴びながら涙を流し尽くすってことはしょっちゅう。

**K**：シャワーで涙を流すって…。

**C**：ははは。でもね、さっきも言ったけど、てるちゃんとか、てるちゃんがつかないでくれた仲間たちとか、レインボーウィークでつながった人たちとか、理解してくれた学友とか、保健館の看護師さんとか、たくさんのお陰で、そんな辛い経験を乗り越えることができた。サバイブするための環境がばっちり整えられていたんだよね。

**K**：そうだったんですね。

**C**：うん。だから、今振り返ると、関学時代は、しんどかったけど、大

切な時期だったし、恵まれた時期だったし、自分を成長させる時期だった。自分と向き合って、新しい歩みを踏み出すために与えられた最高、最善の環境だった。そう思うわけです。

### ③就職活動

K：良いですねー。本来は、岡嶋さんだけではなくて、誰もがそう実感できる大学生活を送れるべきだと思うんですけどね。

C：そうだね。そして、それは、性のことだけに関わらず。

K：ですね。インクルーシブ・コミュニティって、一人ひとりが持っている異なる部分、その部分が消されることなく、排除されることなく、色あせることなく、各々が持つ輝きを自由に放てる場所だって思うんです。で、異なりの部分って、おっしゃる通り、性のことだけじゃなくて、障害についてもそうですし、国籍とか、人種とか、信仰とか、生きることに関係するあらゆるところで出てきて当然なわけで。

C：本当にそう。関学がそんな場所を提供する教育機関であってほしいと心から願います。卒業生として。願うだけではなく、わたしができることであれば、今回みたいな形であっても、他の形であっても、どんなことでも惜しみなく協力していきたいなと思ってます。

K：はい！ お願いします！！

C：はい！ お願いします（笑）!!!

K：大学生活のことをお伺いしましたが、就職活動はいかがでしたか？ しんどいことがありながらも、最高最善の大学生活を終えて、実社会に入っていくわけじゃないですか。あ、岡嶋さんの場合は、一度社会人経験をしているので、戻っていく、と言ったほうが良いですかね？ 再エントリーというか。

C：再エントリー！ 面白い表現。たしかにそうだね。4年間の学生生活というモラトリアムを終えて、もう一度社会に戻っていく。

K：いかがでしたか？ スムーズに戻ることができましたか？

C：うーんっとね、自分のセクシュアリティだけに注目するなら、案外ス

ムーズだったよ。

K：そうなんですね。

C：うん。その前に断っておかなきゃいけないんだけどね、うちね、生まれてから今まで、いわゆる「就職活動」というものをしたことがないの。エントリーシート出して、第1次から第何次かまでの試験を受けて、幹部との面接を経て、晴れて採用通知をいただいて、というような、「正式な就職活動」というのかな。さらに言うと、正社員として働いたことは一度もなくて、ずっと、パートとか、派遣とか、アルバイトとか、準契約とか。あとは、個人事業主という形態だったり。だから、世間一般で言われているところの「就職活動」について、うちが何かを語れるかということ、全く自信がないのです。

K：わたしにとっては、だからこそとても面白いと思います！ あ、面白いという表現は不適切かな。何ていうのかな、魅力的なというか、「正式」ではないからこそ興味深い「就職活動」だと思いますけど。

C：うちね、卒業してから、3つの職業をするようになったんだけどね、そのどれもが、学生時代から関わりを持ってた場所だったの。だから、どの職場でも、うちがどんな人か、あらかじめ分かっていた。性のことについても、それぞれの職場で相談できる人がいて、だからかな。案外スムーズに卒業から就職、卒業後のお仕事に移ることができた。

K：今、3つの職業って言いました？ 3つって多くないですか？ 冒頭で自己紹介されたときに、小さな教会の伝道師と言われていたので、てっきりそこで働いていらっしやるのかと。

C：うん、それは間違いじゃないよ。教会の伝道師は、3つあるうちの一つ。ただ、卒業後すぐに伝道師になれたわけではなくて、日本基督教団の教会で伝道師として働くためには、試験に受からないといけないんだけど、うち、その試験を失敗しちゃって。で、卒業後すぐには、教会の伝道師にはなれなかったんです。

K：そうだったんですね。それで、別のお仕事もしていたわけですか？

C：うん。まあ、働きたい、と思っていた教会自体が、とても小さな教会だったから、伝道師として働いたとしても、他に別のお仕事をしな

いと生活できない状態だったのは分かってたからね。家族もいるので、路頭に迷わせるわけにはいかないし、自分自身も路頭に迷うわけにはいかない。

K：ええ。それは。

C：それで、うち、関学で学んでたときから、お仕事をしてたのね。学生生活と、社会人生活と、家庭生活と、かけもち（笑）。

K：また3つですね（笑）。

C：三位一体（笑）。そのうちの一つはパソコンを使った事務。もう一つは福祉施設でのヘルパー。パソコンの事務の方は、実は関学に入る前からずっと続けていた仕事で、卒業する時点で、もうすでに10年くらいお世話になってたかな。それで、卒業するときに、これからも働かせてくださいってお願いしたら、「いいよ」って。

K：卒業の時点で10年くらいということは、男性として生活していた時代からってことですよ？

C：そう。だから、会社の何人かは、うちの男性のときの姿を知ってる。でも、入れ替わりの激しい会社だから、全く知らない人も大勢。今は知らない人のほうが多いかな。

K：そうなんです。でも、働きながら、男性から女性へ移行していきって大変じゃなかったですか？

C：うーん。大変だったのかなー。その職場が原因で、大変な思いをしたという感じはないよ。The「現代の企業」という感じで、とにかく、「実績をあげればそれでいい」的なところがあって、やることやって、結果を残し続けてくれているのなら、「性別だろうが何だろうが、働き方であろうが、気にしない！」っていうような会社だから。

K：良いのやら悪いのやら…。「生産性」とか「効率」という言葉を思い浮かべてしまいました。

C：まさしく。良いのやら悪いのやら…。でもね、うちにとっては、都合が良かった。それまでに、会社とは10年ほど関わりを持っていて、一応、それなりの実績は残していたから、一緒に働く人たちも、移行していきうちの姿を見て、とくに何も言わなかった。おそらく、その背後には、

理解してくれた上司の配慮があったんだろうけど。そのお陰で、卒業後もそこで働けることになって、で、今は完全に、こんな格好で働いています。とてもありがたい。

**K**：会社の社風というだけでなく、それまでに築いた実績と、会社と岡嶋さんとの間で信頼関係が築かれていたこと。それが大きいような気がします。

**C**：うん。全くその通り。で、もう一つの職場、福祉施設は、パソコン事務の会社とは全く逆。結果重視というよりも、個々の「今、このとき」の存在が大事にされるようなところ。ここも、学生時代からお世話になっていたところで、卒業する時に、「そのまま働かせてください！」って頼んだら、「いいよ」って言ってくれた。

**K**：引き寄せますね。岡嶋さん。

**C**：でしょー。すごいでしょ（笑）。その施設はね、榎本先生が学生時代に紹介してくれたところだったの。大学院1年目の春に履修した授業でね、大学の外で実習を行うことが単位取得のための条件として求められてたの。それで、うちは、その障害福祉施設に行くことになって、デイサービスを利用する障害をもった人たちと関わりを持たせてもらった。で、春学期の終わりぐらいかな、ちょうど、その施設で、「ヘルパー講習を実施する」ってことを聞いて、うちはその講習を受けて、今度はヘルパーとして関わることになったの。授業を受けてたときは、実習生としてだったけど、授業後はヘルパーとして、その施設で働かせてもらえるようになって。で、卒業後は、非常勤職員になることができた。

**K**：ほんとに、引き寄せというか、上手い具合に事が運んだんですね。

**C**：そう。それは本当に感謝なことだなーと思っています。やっぱり、てるちゃん存在は大きい。そして、神様の力が。まさしく棚からぼたもち的な（笑）。それで、そこの施設はね、パソコン事務の会社とは真逆のところ、ミッションステートメントの中で、「わたしたちは、違いを認め合える社会をつくりだす」と宣言しているくらいなの。だから、「違い」ということについては、ある程度の寛容がある職場だった。最

初に関わりを持ったのは、学生時代で、女性への移行を始めたばかりだったから、まだまだ「男性」度合いが強かったけれど、「違いを大事にしてくれる」って信じてたから、働きながら移行していくことができた。まあ、どの職場も、「完全」なんてことはないから、多かれ少なかれ、嫌な思いをすることはあったよ。というか、まだ今でもあるよ。だから、そこは、職場と自分との距離感を上手くとりながら、自分が一番居心地の良い関わり方を模索しながら進んでいってる感じかな。それで、今では女性寄りの格好で、女性として働かせてもらっています。名前も、戸籍上の男性名ではなくて、自分が選んだ女性の名前で。

K：職場と自分との距離感ですか。

C：うん。がつつり関わりすぎるのもしんどくなるし、逆に離れすぎても、対人のお仕事だから職場の空気感とか、職場内での人間関係とかをないがしろにしてしまうと、利用者さんに対して良いサービスを提供できなくなることもあるしね。

K：ああ、そういうことですか。だとすると、それは、働くということだけじゃなくて、他のことにも言えますよね。他者と自分との距離感をどう保っていくのか。わたしは、まだまだそこら辺が分からなくて、苦しくなるときもあります。

C：うん。うちもそうだよ。うちの場合、苦しくなると、たいてい、逃げる!!! 逃げて、怒られる。「勝手にいなくなったら分からないじゃない!」って。

K：ははは。

C：でも、こっちからしてみたら、それ以外に手段がなかったから逃げるわけで。それ以上我慢できない、もうそこに留まれない、だから逃げるといふ道を選んだけど。でも、相手からしてみたら、『我慢できない』ってなる前に、相談して!」、ということなんだよね。

K：そうですね。でも…。

C：うん、でも。相談しにくいもの。そこを振り切って話すということも、また自分にとって負担だったりするわけで。だから、今でも、そこら辺の距離感をどうとっていくのか、学び中なところ、大いにあり

です。

K：わたしも、一緒に学んでいきます！

C：Welcome to the club!!（笑）卒業2年目から始めた伝道師としての働きについても、セクシュアリティのことについて言えば、とてもスムーズに事が進んでいったよ。

K：それもやっぱり、卒業以前、学生時代から関係をもっていたから？

C：うん、それもあるね。それ以外にも、大きな要因としては、赴任する教会の牧師が、うちと同じように男性から女性へのトランスジェンダーだったってこと。

K：えっ???

C：驚いた？ そもそも、うちがその教会を選んだのは、その人が牧師をしてるから、ってところが大いにある。同じような境遇の人がいるから、安心して働けるって思った。それに、何か困ったことがあったら、相談に乗ってくれるかもしれない。関学時代にてるちゃんが整えてくれた安心できる場所を、教会にも求めていたというか。

K：なるほど。実際に、安心できる場所なんですか？

C：うーん。それは…。ノーコメント（笑）。まあ、卒業して1年後ぐらいになると、女性へ移行し出して結構時間がたって、見た目もより女性らしくなってきたし、それに、自分の中でも女性として生きる覚悟もだいぶできていて。度胸も座ってきてたんだらうね。だから、初めから、牧師には、「女性として働きます！」と公言してた。教会で働くための諸々の事務手続きも、すべて女性名を使いました。それで何か問題が起こったということは全くなく、今に至るまで、平穩無事に女性として働くことができています。

K：言うことなしじゃないですか！

C：そうなのよ。だから、感謝。「ありがとーうう！」

K：ははは。お伺いしていると、本当にスムーズに、卒業から就職までを進めていらっしまったように思えますけど、スムーズに行った要因は何だったと思いますか？

C：そうね。こんな風に、変わったルートで就職して、「正式な」就職活

動をしたことのないうちが言うのは的外れなのかもしれないし、これから就職活動に臨んでいく人たちに響くアドバイスになるのか分からないけど。

K：いえ、そんなことは。

C：まあ、一つは、卒業前から、関わりを持っていて、ある程度の信頼関係を築けていたってことだね。これが、一から就職先を探してってことになっていたら、全く違った結果になっていたと思う。それこそ、セクシュアリティのことで壁にぶつかることは大いにあっただろうね。で、卒業前から関わりを持つことができていたのは、やっぱり人脈かな。とくに、教会と福祉施設は、ほぼてるちゃんのおかげ。てるちゃんがつないでくれたから、学生時代から関わりを持つことができた。

K：そうですか。

C：うん。あとは、これ、決定的に若い学生さんたちと違うことなんだけど、関学を卒業して就職するとき、その時点ですでにある程度の社会経験を積んでいた、ということ。それに、これも良い面も悪い面も両方あると思うんだけどね。ある意味、正規のルートに乗らない形での社会経験を積んでいたってことも有利に働いたのかな。うちね、さっきも少し触れたんだけど、関学に編入する前、もう20年以上も前、別の大学に行ってたの。その大学、青山学院大学で学位を取ったのは2000年で、そのまま大学院に進学して、青学を完全に卒業したのは、2002年。その当時、周りの友人たちは、就職活動頑張って、それぞれに望んだ職業について働いていたんだけど、うちは卒業からずっと、さっきも言った通り、就職活動をしたこともないし、正社員として働いたこともない。なぜそうなったかということ、自分のやりたいことがあったから。

K：かっこいい！

C：と言われることを期待して言ってみた(笑)。ありがとう(笑)。でもね、今振り返れば、正直、そのルートに乗るのが怖かった、という思いもあった。それに、自分の中で、一つの会社で、そこに縛られて働く、ということが嫌で、まったく想像できなかった。感覚的などころなのかな、わからないんだけど、自分はその道には行けない、という思いが強くあっ

て。まあ、結局、バイトにせよ、パートにせよ、個人事業以外の働き方って、どこかに雇われることになるから、その意味では雇い主の影響力から完全には自由ではないんだけどね。だから、そこは妥協できるんだけど、というか、しないと生きていけないから、だけど、「正社員」でどっぷり浸かることだけはできないって。強烈な意志。今でも強く持ってる。

K：一匹狼的な？

C：と、言われると、案外そうでもなくて。一人でやってる、という感覚はない。むしろ、一人ではできない人間だから。助けてくれる人がいないと、無理。なんだろうね、一匹狼ではないんだけど、一つのところに留まり、属することに対する違和感というのかな。初めのうち、20代で青山学院大学を卒業したてのころは、まったく明確な形ではなかったんだけどね、この進み方じゃないという漠然とした思い。じゃあ、どんな歩みを自分は望んでいるのか、と問われると、確かなことは言えなくて、なんとなく、大学院に残るとか、バイトで働くとか、そんな形で表れてた。で、その時々で、自分自身の内に湧き起こる感覚を大切にしていたら、今のような状態になって、青学を卒業してから10年以上たったあと、「再び就職活動をしよう」というときに、それまでの経験が役に立ったという感じかな。

K：なるほど。

C：うん。だからね、今の学生の皆さんに、うちが言えることとしたら、まずは、自分の感覚を大切にすればいいんじゃないのかなと。そして、どんな形でもいいので、卒業後に足を踏み入れることになるであろう社会、世界、業界といってもいいかもね、そこと何らかの関わりを持ってみたいんじゃないかな。そうすることで、その社会、世界、業界がどんなところか、見えてくることもあると思うし。セクシュアリティのことについても、何らかの情報を得ることだってできるだろうし、自分の肌で、そこの空気を感じることもあってできると思うから。関わりを持ってみて、空気を感じてみて、「ここは違う！」と思ったら、その感覚を大事にしてあげればいいのかと。あんまり、えらいことは言えませんが。

K：いえいえ、とても参考になります。自分の感覚と、卒業前からの関わり。たしかに、探せば、関わり方はいろいろとあると思います。大学の学生部などでも、そんな情報を伝えてくれていると思うし。それに、今はインターネットで、多様な性に理解のある企業情報が公開されていたりしますしね。

C：うん、だから、活用できるものは思いっきり活用して、あとは、自分の感覚を磨いて大切にして、ともに歩んでくれている仲間たちを大事にしていけば。

K：なんか、希望が持ててきました。ありがとうございます！

C：いえ、本当に、参考になるのかどうか、わからないので、話半分で（笑）。

#### ④卒業から現在まで

K：就職された後のことを聞かせてください。先ほど3つのところに就職されたとお話しされていましたが、今でも同じところで働いていらっしゃるのですか？

C：そうですね。まあ、正確に言うと、あと2つ、別の職業を持ってるんですけど…。

K：え？ さらに2つも？ じゃあ、合計5つ？

C：そういうことになります。でも、開店休業中なお仕事もあって。それに、このことを話し出すとますます長くなりそうなので。

K：わかりました。それにしても、すごいですね。

C：うん、自分でもすごいって思う。副業時代って言われますけれど、うちの場合、サブという意味での「ふく（副）」ではなくて、多数という意味での「ふく（複）」で、複業（笑）。

K：「複業」ですか（笑）。

C：その複業のことも含めて、卒業後から今までのことを思い返すと、関学に入学した時に起こった「想定外」が今もなお続いているなーという感じですよ。

K：想定外、というと？

C：特に、人間関係というところでの想定外。うち、もともと、交流範囲が広くないほうだったんです。むしろ、狭い。実家は青森なんですけど、今でも連絡を取っている地元の友人は一人もいないし、青学時代の友人も連絡を取り合うのは一人しかいないし。関学入学前に働いていた職場でも、友人と呼べる人はほとんどいなかったし。だから、関学以前は、わずかに残った数名の友人と、自分の家族と。それぐらいの範囲がうちにとっての人間関係の広さだった。

K：意外です。

C：それがね、関学に入って、てるちゃんを中心に、新しい関係がどんどん築かれていって、気心知れる仲間たち、うれしいことも悲しいことも共有し合える友人たちが増えていって。卒業後も、その仲間たち、友人たちとの交流は続いていったんだけど、卒業したら、さすがに新しい人間関係はそんなに多くは生まれえないよなーと思ってた。就職先も、卒業前から関わってたところだったしね。新しい出会いはそれほどないだろうと。

K：なるほど。

C：ところが、蓋を開けたら、びっくり仰天!! 卒業後も、てるちゃんとのつながりで生まれる新しい関係や、てるちゃんとは直接関係のないところで生まれる関係が次々と築かれていったの。それも、うちの予期せぬところで、予期せぬ時に、予期せぬ形で。気づかないうちに、あれよ、あれよという間に広がる交流の幅。そうやって出会う一人ひとり、それぞれに異なる価値観を持っていて、自分自身の生きる場、存在の場を持っている人たちばかり。とっても素敵な人たち。うれしいことだけじゃなくて、苦しいことも、悲しいことも共有できる人。それまで知らなかったことに気づかせて、教えてくれる人。それに、心の深いところで共鳴しあいながら時間をともにできる人であったり。お互いの違いを認め合いながら、違いながらも、というか、違うからこそ、なのかな。手を取り合って何か事にあたったり、一つの道に進めるような仲間がいっぱいになってきています。いろんな背景と、才能と、経験と、知

識をもった人たちだから、「みんな集まったら、すごいことができるんじゃない？」って思いたくなるような人間関係なんです。

K：「神の見えざる手」が招く謎の人間関係（笑）？

C：まあ、そんな感じなのかな。うまいフレーズ！ それでね、毎回、出会いの一つひとつがちゃんと意味があるんだなーって思われる。もちろん、出会ったばかりのときは、わからないことが多いんだけどね。ある程度の期間、一緒にいるようになると、「あ、この人と出会えたのは、こういうことが必要だったからなんだ」と思えてくる。それがポジティブな意味の時もあるし、ネガティブな時もあるんだけど、一つひとつが必然の出会いなんだって。そして、その出会いを通して、成長させてもらってる。

K：ご家族との関係はいかがですか？ 先ほど、結婚なさっていて、お子さんもいらっしゃる、ということでしたが。もちろん、プライベートのことなので、お話しできればで。

C：そうね。それ、自分の中で、一番の課題かな。自分の性を考える上で、なんだろう、一番うまく対応できていないところ。うーん。正直、ここで話せないことのほうが多い。ごめんね。これまでは、話しすぎるくらい話してきたのに、急に。ただ、家族のことにも関わってくるんだけど、最近、「男性」である自分が「女性」として生きる、そのことの責任というか、意味というか、考えさせられています。

K：というと？

C：うち、出生時に男性として判断されて、それ以降、30年以上男性として生きてきたわけでしょ。だから、うちは、この社会が「男」という性に与える利益を享受してきたと思うの。

K：そう言われると、そうかもしれないですね。

C：うん。日本で男女共同参画ということが言われるようになるのは、1990年代半ばくらいからだど記憶してるんだけど、1996年に青学に入学したときに、初めてフェミニズムという言葉を知って、驚いた。それまでは、ばりばりの男性優位の社会の中で生きてきて、それが当たり前、ぐらいにしか思ってなかったの。おかしさに気づいてなかった。だ

から、うちが意識しているか意識していないかに関わらず、多少、いやかなりの程度、「男」という性だからこそ享受できる利益を受けてきたし、「女性」を抑圧する制度に加担していたはずなんだよね。1999年に男女共同参画社会基本法が成立したのは、そんな社会に対して、国レベルで初めて「No」と言ったわけで。国際的な圧力もあったとは思っただけだね。

K：ええ。

C：だからね、うちは、女性差別の加害者側の性に属してきた者として、利益を受け、女性の抑圧に加担してきたという過去を拭い去れないはずなんです。その自分が、今になって「女性」として生きるということ。それはいったい、どういうことなんだろうと。性を変えて生きる自分を、男女平等という社会の中でどうやって位置づけていったらいいんだろうと。もちろん、簡単に答えが出るような問いではないです。海外では、「トランスジェンダー女性は女性か？」という議論がおこってるようだし。それに、今うちが言葉にした内容だけでは、十分に捉えきれない部分があると思うし。

K：そうなんですネ。

C：うん。うちは、「男性」として生きてきた過去を完全に捨て去ることはできない。今もある一面では「男性」。で、「男性」として生きてきた、その事実を、過去をしっかりと受けとめて、その過去と事実を直視して、そこでわたしが行ってきたことへの責任を取ることなしに、「女性」として生きることはできないんじゃないかなーと。

K：難しい課題ですね。ちょっと、わたしには分かりにくいというか。やはり、その経験をしている本人でないと理解しにくい部分があるんでしょうか？

C：自分の中でもまだ上手く言葉にできないんだけど。ある人がね、「フェミニズムなくしては性の多様性はない」と教えてくれたの。これ、うちが今言ったことに近いかな。「多様な性！」と声高らかに叫ぶ一方で、思いっきり女性差別に加担するとか、女性差別を容認するとか。それじゃあ、全く意味がないから。

**K**：おっしゃる通りですね。そう言われてみると。友人が言ってたんですけど、アルバイト先で、上司が「僕は、どんな性別の人も、どんな性的指向の人も、働いてくれることになんの抵抗も持ってないよ」と言いながら、女性の従業員に対して「結婚まだなの？」とか、「子どもつくらないの？」とか聞いてくる、ということがあると。

**C**：そう。だからね、「性の多様性」を叫ぶだけではやっぱりダメで、それを叫ぶからには、フェミニズムのこれまで、現在、これからをしっかりと踏まえて、女性差別に対してもきっぱりとNoと言えないといけな、と思うわけです。わたし自身のことで言えば、それに加えて、「男性」という性別で生きてきた事実に対しての責任をとっていくということが不可欠だと。

**K**：おそらく、長期的な課題なんでしょうね。個々の努力とか、活動とか、発言とかで一瞬にして変えられるものではなくて、社会全体で取り組むべきものだと感じます。

**C**：うん、まさしく。だからといって、社会という漠然としたものに任せるだけではなくて、やっぱり、個々人が常にその姿勢を持ち続けていくことが求められる。だから、長期的にならざるをえないのかな。

## ⑤在學生へ向けてのメッセージ

**K**：最後に、在學生へ向けて、何かメッセージをいただけないでしょうか。これまでのお話の中でも、いくつか上がってきたと思うのですが、それも含めて、また、それ以外のことで、何かお話ししておきたいことがあれば、お願いします。

**C**：そうですね。まず、関学という環境、場を存分に活用してほしいです。もちろん、完璧ではなくて、まだまだ足りないところもあると思うのですが、わたしが在学中の4年間を通じて感じた限りでは、関学には性の多様性について理解のある教職員が案外います。今回の企画に加わってくださっている人権教育研究室の武田先生もそうですし。それに、レインボーウィークをはじめ、性の多様性に関して、自分で学んだり経験

として知ることができる機会が多いと思います。だから、その環境を存分に活用して、自分自身が安らげる居場所を創り上げて行って欲しいなど。各々の専攻についてはもちろん、セクシュアリティやそれ以外の多様性のことについて、学び成長できる場だと思いますから。

**K**：はい。そのためには、やっぱり、まずは大学全体として、多様な一人ひとりが、もっともっと過ごしやすさを感じることができる環境でないといけないと思うんです。だから、在学生も、教職員も、もっとセクシュアリティのことについて知識を身につけ、その知識を活用できるようにならないといけないと思うし。それに、「こんな情報があります」とか、「こんな部署がこんなことをやっています」とか、「こんな教職員がこれだけのサポートできます」とか、そんな広報をしていくべきだと思うし。

**C**：まさしく！ そこ!! あとね、LGBTQIA+という、いわゆる「セクシュアルマイノリティ」であっても、そうではなくても、どんなセクシュアリティであるかに関わらず、性のことを含め、一人ひとりが、自分のこと、「今」の「この」わたしを大事にして好きでい続けてほしいなって思います。多様な性って、何も、セクシュアルマイノリティのことだけじゃないんですよ。そもそも、マイノリティとマジョリティを区別することがおかしいわけで。少なくともわたしはそう思ってるんですけどね。

**K**：わたしもセクシュアルマイノリティという言い方には何かしっくりしないものを感じていました。

**C**：うん。マイノリティと言うと、マジョリティがあるわけで、そこに区別が生まれちゃう。でも、本来は、区別をすることが目的じゃないから。マイノリティがいるから性が多様になっているのではなくて、一人ひとりの性がもうそれ自体で多様なんだよね。その多様な性を、神様がよしとしてくれている、とわたしは信じています。

**K**：はい。

**C**：本来、どの人の性も、束ねることなんてできっこないんです。束ねることのできないものを無理矢理に束ねて、「こっちは多数派、あっちは少数派」、「こっちは正常、あっちは異常」、「こっちは普通、あっちは特

別]、「こっちは生産性があるけど、あっちは生産性がない」なんて区別を設けて、価値判断を加えるから、おかしいことになる。多様な性を体現している一人ひとりが、生きにくい、生きづらさを覚える社会になっていくんだろうなど。

**K**：ええ。確かに。

**C**：だからね、一人ひとりが、自分の性をもっと大事にして、隣にいる人たち、これから隣にいてくれるようになる人たちの性をもっともっと大事にできればいいんじゃないかな。「わたし」の性が、「誰か」と違っていたとしても、「隣にいる人」の性が「わたし」の性と違っていたとしてもいいんだし。違っても、誰かを嫌いになるために、争いを生み出すためにあるのではなくて、むしろ、違うところを見て、お互いに、「それってすごいね！ 素敵だね！」と言い合うためにあるんだろうと思うんです。それで、「あ、わたしのこの部分って、違ってるけど素敵なんだね！」と気づくの。一人ひとりが、それぞれの違いに、違うからこそその素晴らしさに気づいて、自分自身の性を存分に生き抜いていけばいいんだろうなど。関学では、「それが出来るはず！」なので、このインタビューを含めて、これからの関学の取り組みに大いに期待しています!!

**K**：素敵なメッセージをありがとうございます。

**C**：こちらこそありがとうございました。

※このインタビューは、架空のものです。インタビューである私（岡嶋千宙）が、「神楽かな」という実在していない人物をインタビューアールとして仮定し、私が今回のインタビューを受けたら答えたであろう内容を対話形式でまとめました。インタビュー自体は架空ですが、ここで語られている内容は、私にとっての真実で現実です。

